ミュージカルを楽しむ法

野口久光

晶文社

著者について

野口久光（のぐち・ひさみつ）

一九〇九年生まれ。東京美術学校（現・東京芸大）卒業。東和商事（現・東宝東和）に入社。約三十年にわたり、映画ポスターを手がけ、高く評価される。また、戦前から、映画、ジャズ、ミュージカルの評論家として活躍。長年の活動により、一九七八年紫綬褒章、一九八三年勲四等旭日小綬章を受ける。一九九四年逝去。

著書

『素晴らしきかな映画』（晶文社　1992）
『想い出の名画』（文藝春秋　1995）
『野口久光ベストジャズ　I、II、III』（音楽之友社　1995）
『私の愛した音楽・映画・舞台』（ミュージック・マガジン　1995）

ミュージカルを楽しむ法

一九九七年一二月二五日初版

著者　野口久光
発行者　株式会社晶文社
東京都千代田区外神田二-一-一二
電話東京三二五五局四五〇一（代表）・四五〇三（編集）
振替〇〇一六〇-八-六二七九九
牡光舎印刷・美行製本

© 1997 Hisakazu NOGUCHI

Printed in Japan

Ⓡ本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製（コピー）することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター（〇三-三四〇一-二三八二）までご連絡ください。

〈検印廃止〉落丁・乱丁本はお取替いたします。

ミュージカルを楽しむ法

野口久光

江苏工业学院图书馆
藏书章

晶文社

晶文社　定価［本体2600円＋税］

ミュージカルを楽しむ法

野口久光

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ブックデザイン　晶文社編集部

ミュージカルを楽しむ法　目次

心はいつもフレッド・アステア　石塚克彦　11

i　ミュージカルがやってくる

1　ミュージカルのたのしさ　16
2　ミンストレル・ショウにはじまる　23
3　オペレッタの全盛時代をつくった三人の作曲家　30
4　レヴューの王様、ジーグフェルド　38
5　『ショウ・ボート』がひらいた新しい道　47
6　『アニーよ銃をとれ』とアーヴィング・バーリン　56
7　パリのアメリカ人、コール・ポーター　65

8 『ポーギーとベス』とジョージ・ガーシュウィン 75
9 ブロードウェイの王者、リチャード・ロジャーズ 84
10 ミュージカルの黄金時代をつくった二人 93
11 『三文オペラ』とクルト・ヴァイル 104
12 『マイ・フェア・レディ』と『ウエストサイド物語』 112
13 一九六〇年代のヒット・ミュージカル 121

ii もっとミュージカルを楽しみたい

14 なんでもミュージカルになる？ 132
15 『屋根の上のヴァイオリン弾き』の素晴らしさ 141
16 『ジェローム・ロビンズ・ブロードウェイ』来日公演を見て 149

17 新世代の旗手、スティーヴン・ソンドハイム 157
18 ロンドン・ミュージカル、ブロードウェイを席巻す 165
19 オフ・ブロードウェイに魅せられて 173
20 オフ・ブロードウェイの冒険 181
21 レヴューの魅力 189
22 レヴュー映画の傑作ふたつ 196
23 なぜ、ミュージカル映画に傑作が少ないか 204
24 ミュージカル映画の最高傑作は『自由を我等に』である 213
25 ミュージカルのプロデューサーとは？ 222
26 ミュージカルは世界中の人々に愛される 230

iii 日本のミュージカルのために

27 めざせ、ブロードウェイ！ 240

28 ケイジャンの人々とその音楽 247

29 『レイバー・オブ・ラブ』の奇跡 258

30 ミュージカルの魅力の秘密について考えてみよう 265

31 日本人がミュージカル好きになった理由 272

32 「ふるさときゃらばん」十年史 280

解説 ミュージカルはどんな藝能か 喜志哲雄 289

作品名索引 ix

人名索引 i

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

イラストレーション　和田誠

心はいつもフレッド・アステア

野口久光さんのこと

石塚克彦

野口久光さんから電話があるのは、夜中だったり早朝だったりだった。何ごとかと受話器をとると、たいていミュージカルや映画の試写会の誘いだった。そして、「いつにするの？」と私にスケジュールを決めさせるのだから、何をさしおいても行かない訳にはゆかなかった。

久光さんが有無を言わさず誘う舞台は、ミュージカルの脚本・演出を仕事にしている私がどうしても観ておかなければならないようなモノばかりだった。「サラフィナ」「トポルの屋根の上のヴァイオリン弾き」「ジェローム・ロビンズ」など数えきれない。「ナポリ・ゴールデン・センチュリー」は、イタリア民謡をつづった舞台だったが、フレスコ画のような渋い背景画が美しく芸術していた。

久光さんは、脚本の私と作曲の寺本建雄と振付で主演女優の天城美枝がコンビを組んでミュージカルを創作していることを気に入ってくれ、応援団長を自認してくれていた。応援するからに

はいい作品をつくってくれなくては困ると、言ってみれば、有無を言わさず私を誘い出すのは野口久光ミュージカル教室であり、久光さんは私の家庭教師のようなものだった。とてつもなくありがたい贅沢な家庭教師であるけれども。

久光さんとミュージカルや映画を観に行くときは、いつも新鮮なときめきがあった。四谷の駅で待ち合せたとき、私とプロデューサーのひらつか順子を見つけると、久光さんは若者のように階段をリズミカルに駆け降り、最後の二段をピョンと飛びこし、ポーズを決めた。そのとき久光さんはフレッド・アステアだったのだ。

舞台がはねた後は、必ずお茶をしながら、今観た舞台について心ゆくまで話し合い味わいなおした。その時、久光さんが何を私に見せたかったかがよく解り、感じたことが久光さんと一致するとヨロシイ！　といった満足気な表情でお茶をすするのである。

野口久光さんのミュージカルや映画やジャズの話は、その作品の楽しさだけではなく、それを生み出した人の人間としての魅力や素晴らしさを教えてくれた。「あの人はね…」とまるで親しい友人について話すような語り口で。

久光さんが、私の劇団ふるさときゃらばんの季刊誌に連載してくれた「ミュージカル物語」は、ミュージカルを生み出した社会的背景と力、つくり手たちの個性的な魅力、その作品の躍動や感動にあふれており、私たちにミュージカルの楽しさを教え続けてくれた。それが、高平哲郎さんとアイランズのスタッフの手で本になり出版されることになった。嬉しいことである。

私が初めて読んだミュージカルについての本は、野口久光さんの「ミュージカル入門」である。

そのとき遠くから尊敬しあこがれていた当の久光さんに、出会うことができ、直接教えてもらうことになり、私たちの公演に付き添ってくれ一緒に旅もした。日米合作ミュージカルのアメリカ公演ツアー、オリンピック芸術祭に招聘されたときのバルセロナ、日本列島の北から南まで、いたるところに久光さんは心配し付いて来てくれ、何万キロもロードした。

日中国交正常化十五周年の文化使節団として、ミュージカルナンバーのコンサートでツアーしたときのことである。政治のくに中国は客を歓迎する演説などはお手のもので、まるで漢詩のような見事な言葉が並ぶのである。

公演チームの後見人のような立場で同行してくれた久光さんに、その返礼のあいさつの番がまわって来た。ところが久光さんは、突然ゴメンナサイと頭を下げた。戦争中私たち（日本）は、あなた方（中国の人々）に本当に申し訳ないことを沢山やった、なのにこんな迎え方をされ、何と言っていいか言葉がないと、声をつまらせた。久光さんは当時、映画の仕事で上海に居て、心を痛めていたという。

調子のいい乾杯で盛り上がっていた座はシーンと静まりかえった。次の瞬間、中国の人々は要人だけでなく、料理を運んでいた人までもが久光さんめがけてかけ寄った。握手を求める者、抱きつく者、皆んな涙していた。日本の人からこんな心のこもった言葉を聞いたのは初めてだと言った。そして口々に久光さんに逢えて嬉しいと、語り出した。

私たちを国賓待遇で迎えるための公式パーティーは、何故か涙をともなった、もう無茶苦茶な心の底からの交流の場となってしまった。格式ある美辞麗句はそぐわなくなった。野口久光さん

はそんな人だった。

久光さんは批評家としてものを見るときも、人と付き合うときも本当に嘘のない人だった。だから久光さんには、心からの友だちが国境を越えて沢山居た。カウント・ベイシーやB・B・キング、アート・ブレイキーもそうだった。あの無声映画時代からのスター、リリアン・ギッシュもそうだった。久光さんがあの世に逝っちゃったとき、海の向こうでペニー・カーターが泣いていた。

野口久光さんはもうこの世に居ないけれど、久光さんの二冊目のミュージカルの本が出来る。久光さんは、私たちの心の中に、ひょいと振り向けば、そこに少し気むずかしいフレッド・アステアのような風貌で立っているような、現実感をもって生きている。久光さんを知っている人も、知らなかった人も、この本を読んで、ミュージカル大好き人間のステキな野口久光という人に再会して欲しいと思う。

（「ふるさときゃらばん」作家・演出家）

i

ミュージカルがやってくる

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com